
魔法少女に恋焦がれ

ばく庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女に恋焦がれ

【Nコード】

N4000T

【作者名】

ばく庵

【あらすじ】

青年、衛修司は不思議な夢を見る。

しかし、目が覚めてもそこは夢の続き……？

それなら、いつその夢を楽しんでやろうじゃないか。

魔法少女まどか マギカにイレギュラーな青年が登場！

ハートフルボッコかつハーレム！

そういうのが嫌いな方は即回れ右を。

平気な方はそのままお進み下さい。

第一話 「夢の中で見たような……」 (前書き)

初投稿で御座います。

稚拙な部分もあるかも知れませんが、よろしくお願いします。

誤字脱字のないようにはしていますが、もし見つけられた場合は遠慮なく感想などに文句を言いに来てください。

第一話 「夢の中で見たような……」

夢を見た。

見たこともない女の子たちが、良く分からない大きなナニカと戦っている。

大きなナニカは、逆さになった女性のような姿をしており、下半身に当たる部分は巨大な歯車で構成された化け物だった。

それと戦う少女の人数は4人。

一見、少女たちがアレを押しているように見えるが、それは違う。ナニカは楽しげに、歌うように笑っているのだから。

対照的に、少女たちの顔には玉のような汗が浮かんでいる。

状況を掴みきれない俺であっても、少女たちが苦戦しているであろうことは明らかだと思えた。

四対一でも少女たちを翻弄するような強さ……。

アレは一体なんなのだろう。

鬼か、悪魔か。

もしかすると、女神なのかも知れない。

少女たちは、そのナニカから放たれる物体……砲弾？ に墜とされていく。

良く見ると、少女たちが戦っているのとは別に、すでに廃墟となつたビルの残骸にもう一人だけ少女が立っていることが分かった。

桃色の髪をリボンで二つに纏めた学生服を着込んだ少女。

隣には、妙な犬（兎かも知れないが）がいる。

何かを話している様子だ。

……人語を話せる生物なのだろうか？
不思議だ。

まあ、夢なのだから当然かも知れないが。

そういえば、なぜ俺はこれほどまでに客観的に見ているにも関わらず、彼女たちが汗を流していること、少女が妙な生物ナマモノと話していることなど、普通はそんな細かなところまでは見えないのではないか？先程のように、夢だからという理由で納得すればいいのだろうか、何とも言えない違和感を感じてしまう。

もしかして、この夢では、俺も彼女たちと一緒に戦っているのだろうか。

人智を超える力を使って、あの巨大で強大なナニカと戦っていたのだろうか。

だとしたら、彼女たちが撃墜された理由には、突然戦力である“俺”が傍観し始めたことにあるのではないか。

……馬鹿馬鹿しい。

これは夢なんだから、そんな変な考えは捨てるべきだ。

そもそも、視点が近いだけで俺も戦っているという発想もおかしい。夢だからこそその中途半端な思考が生み出した結果だ。そうだ、そうに違いない。

早く、早く俺を現実に戻してくれ……。

ああ、だんだん、意識が、覚醒していく……。

魔法少女に恋焦がれ 第一話「夢の中で見たような……」

突然だが、俺は魔法少女が好きである。

世界を守る為に悪と戦う。

うん、かっこいい。

だが、それ以上に、だ。

まず魔法少女は基本美少女になる。

それは近代に絞った話ではなく、数十年の時を経た今であっても色褪せない過去の物も含めてだ。

サーちゃんとか、アツちゃんとか。

絵柄の好みはあるだろうが、少なくともあいつた世界観においては、例に上げた二人は美少女と言っても遜色ないはず。

つまり、魔法少女⇨美少女という方式はほぼ100%成り立っているのだ。

そして、上記の式が成り立ったことによって、もう一つの魔法少女モノを構成する要素が重要になる。

それは『変身シーン』だ。

俺のこの脳内の独り言を見ている奇特な皆様なら何となく分かるだろうが、魔法少女ないし、戦う美少女モノにおいて、主人公やその仲間たちは基本的に変身し、強くなった姿で戦うだろう。

大抵、そういう変身する力はマスコットのなキャラから授かったり、不思議なアイテムを使ったりと元々の本人の能力とはあまり関係ないパターンが比較的多いのだが…。

おっと、少し話がずれた。

まあ何が言いたいかというと。

変身シーンってのは…美少女たちのあられない姿を見ることが出来るのだ！

……………ここまで引張っておいて、言いたいことがそれというのも多少申し訳ない気持ちはあるが。

そのあたりは愛で乗り越えて欲しい。

俺へではなく魔法少女への愛で。

頑張れ、魔法少女を愛する者たち。

さて、ここまで散々妙な脳内独り言……という名の“現実逃避”を聞いてもらったわけだけど、折角だから今度は俺の悩みを聞いてくれないか？

ああ、別に前々から悩んでたわけじゃない。今さつき、悩まざるを得なくなっただ。

それに、良く聞くであろうあのセリフというわけでもない。…一応、ね。

限りなく近いけれど。

あー、そろそろ言葉として口に出した方が良さそうだ。

既にだいぶ時間食ってるけど、これ以上は余計にこじれそうだ。

いいよね？ 言っちゃってもいいよね？

「知らない教室だ…」

うん。どこだろう、こじ。

やけに近未来的な黒板に、全面ガラス張りの教室。

しかも机と椅子は床から飛び出してるときた。

どう見ても近所じゃない。

寝る時は普通に部屋にいたはずだった。

頭の中で、なのはちゃんやフェイトちゃんとちゅっちゅしてる妄想

はやってたけど、それ以外は全く、だ。

なんだか変な夢を見ていた気もするが…？

「衛くん、衛修司まむせうじくん。寝惚けるのは結構ですが大声は出さないように」

「あ、すいません…」

先ほどの「知らない教室」発言が聞こえていたらしい。

嗜める教師の声に、反射的に返事をしてしまう。

周りから聞こえるクスクスという笑い声が妙に気恥ずかしい……。
いや　　待て。

この教師、どうして俺の名前を知ってる？

そもそも、“俺がこの教室にいること”に対して、教師含めて周り
がなんの疑問も持たないのも変だ。

どう考えても異常事態だった。

周りを見渡すのも重要だが……今は冷静にこの状況について考えよ
う。

インターネットという名の海を無駄なほどに泳ぐという無意義な経
験を持つ俺は、この状況を説明出来るワードを二通り思い付いた。

一つは単純に「夢」だ。

寝たにも関わらず自室でなかったという現状、現実的に考えればま
ずこれだろう。

二つ目の可能性を完全に否定出来なくとも、自分自身これが正解だ
ろうと踏んでいる。

二つ目はネット世界御用達…所謂「トリップ」というやつだ。

テンプレ、とも呼ばれるが…現実になんか普通には考えてある
わけがない。

俺自身、先程の現実逃避とか少しアレな部分はあるが、妄想と現実
の区別はつくのだ。

いやまあ、実際にアニメとか漫画の世界に入れたらいいな、という
夢は見たことある。

ただ、それは『有り得ないこと』だと俺は知っている。

何度も言うが、俺は妄想と現実の区別はついている。

これほどまでに冷静に思考できる夢も珍しいとは思うが、これが現
実だなんて酔狂も甚だしい。

だからほぼこの可能性はゼロと結論付けた。

と、いうわけだ。
せっかくの夢なのだから、この不可思議近未来空間を楽しもうと思
う。

正直、未だに状況を掴み切れてはいないが、所詮は夢。
目が覚めてしまえば忘れてしまうのなら、右も左も分からないまま
でもいいんじゃないかね。

なんやかんやで授業は終わった。

夢の中の俺の成績は知らんが、今の俺にとっては何の苦勞もしない
内容だった。

というか、中学レベルの問題だったな。

軽い予想をするならば…夢の俺の知能が俺と同じなら、簡単すぎて
寝てしまったというなら頷ける。

逆に、難しすぎて投げたという可能性も捨てきれないが…。

「衛くん」

「……ん？」

不意に可愛らしい女の子の声が俺の耳に届いた。

呼ぶのは間違いなく俺の苗字。

衛なんて苗字は珍しいんでね…。

で、顔を上げると金髪の美少女。

どことなく、既視感を覚えた。

まるで、夢の中で見たような……。

美少女は、その綺麗な金色の髪を左右にくるくるの形で巻き上げていた。

ドリルヘアというやつか。

そんな髪型を夢の中とは言え見ることになるとは思わなかったが、この少女なら似合っていると言えた。

というか、金髪で美少女という要素を揃えればドリルヘアは必ず似合うのではなからうか？

……今考えることじゃないか。

しかし、相手は俺を知っているんだろうが、俺は相手を知らない。

何とか自然な形で名前を聞き出せないだろうか…。

取りあえず、いつまでも返事をしないのは失礼だ。

無難な形で返すことにした。

「どうかしたのかな？」

よし、これなら相手から話を進めさせることが出来るし、不自然でもない。

悪くはないはずだ。

それに、訝しんでる様子じゃないのを見るに、俺は普段からこの口調のようだ。

「うん、大した用事じゃないんだけどね。何だかいつもよりもちゃんと授業に取り組んでるような感じがして…。ほら、前私に相談してくれたじゃない？ 成績が伸び悩んでるって」

………なん、だって？

驚愕の事実！

夢の中の俺は予想（後者）に則り馬鹿だったらしい！

まさかこんな少女に頼るほどの頭の弱さだったなんて…。

夢とは言え、予想以上のショックだった。

「あ、あー…うん。いつまでもこのままじゃいけないと思って、ね」
「そうなの、いいことだわ」

少女はニコリと笑う。

その瞬間、どきりと胸が高鳴った。

先ほどまでの、矮小で陳腐なシヨックが吹き飛ぶほどに。

俺は、彼女の笑顔に見とれてしまう。

そして、同時に彼女に感じた既視感の正体を知る。

夢の中の夢　あの戦いの世界。

彼女は戦っていた少女達の一人だった。

あの夢の中で、最終的に彼女も倒れてしまったが、優雅に戦っていた。

他の少女たちもそうだったが、彼女たちは……あの絶望的な戦いの中で、最後まで諦めていなかった。

その身を散らす最後の時まで

「、……くん？ ……衛くん？」

「あ…。ご、ごめん…なに？」

「なんだかぼーっとしてたみたい。大丈夫？」

余程あの記憶は鮮烈だったのだろうか…。

相当に思考に耽っていたらしい。

会話している最中に相手を無視して考えに没頭してしまうとは……
不覚！

ひとまずはこれ以上彼女に心配をかけるわけにもいかない。

別に身体が不調を訴えているわけでもないのだし……。

「ああ、大丈夫。心配しなくても平気さ」

「でも」

彼女がまだ俺に何か声を投げかけようとする。

だが、その声は不意に現れた第三者によって遮られた。

「巴さん。確か面談まだだったでしょう？ 少し予定を決めたいのだけれど」

「あ……………、はい」

先ほどまで授業を行っていた教師だった。

どうやら彼女は少なくとも巴という名前（苗字？）だというのが分かった。

どちらとも判断できない辺りが辛い、俺自身似たようなものだから、文句など言えようはずもない。

巴さん（断定は出来ないが苗字と仮定してこう呼ぶ）は、目で「また後で」と伝え、教師に連れられて教室を後にした。

アイコンタクトなど普通はほいほい出来るものではないのだろうが、彼女の目を見た時にそう言いたいのだと直感していた。

間違いだったにせよ、所詮は夢なのだからさしたる問題もないだろう。

俺は、一旦巴さんのことを頭から外し、机の中に乱雑に詰め込まれたプリントを整理することにした。

第一話 「夢の中で見たような……」 (後書き)

というわけで第一話でした。

主人公の修司くんはママさんと同学年です。

そこらへんを上手く使ってさやかとかの扱い辛いヒロインの救済を出来ないかな…と。

さらに、同学年というのを利用して、ママさんをぼっちにさせないという作戦。

ぶっちゃけ、作者はママさんが一番好きなんですね、はい。

おっぱいとかじゃなく、なんかこう、包容力的な意味で。

第二話 「そもそもこれは、本当に夢なのか？」（前書き）

二話目です。

見てくれている何人か、もしかしたら全員かも知れませんが、

「おせえな……」

とか思われていたかも知れません。

すいません。

これでも自分にしては早い方です。

むしろマッハです、光速です。地球を一秒で七周半です。

誤字脱字あればご報告下せえ。

第二話 「そもそもこれは、本当に夢なのか？」

巴さんが戻って来たのは休み時間の終わる直前。

よって、先ほどのアイコンタクトによる「後で」は先延ばしになってしまった。

こちらとしては、プリントの整理はとっくに終わっていたため、何時でもスタンバイ状態だったのだが……。

こう言っただけだが、肩透かしを食らった気分ではある。

結局、すべきネタもない俺は、退屈な授業の時間をただ聞き流して過ごすだけだった。

…夢の中でも退屈を味わわなければならないとは。

そうして訪れた放課後。

俺と巴さんの二人は、ホームルームが終わった直後にはすぐに教室を出、屋上へ向かった。

辿り着いた屋上は、何処か寂しげな印象を受ける。

空も、町並みも、当たり前のようにそこにあるのに、

この屋上だけは真白で、まるで別の世界のようにだった。

魔法少女に恋焦がれ 第二話「そもそもこれは、本当に夢なのか？」

巴さんが先に歩み出て、中心に大きく鎮座する椅子に座り込んだ。

正直、あれを椅子と形容していいのかは定かではないが…
ともかく、俺も巴さんに倣い座る。

真横に座るのも失礼かと思ひ、だいたい二人分は入れるであろうスペースを空けておいた。

「衛くん…いえ、修司くん」

巴さんが俺の『名前』を呼ぶ。

…まただ。

また、どきりとした。

不可思議な鼓動。

それを感じる度に、俺の心は彼女を捉えて離さない。

「もつと、こっちに寄ってもいいのよ…?」

「……………え?」

…なんだ?

休み時間の話の続きをするんじゃないのか…?

ここに来るまではそういう雰囲気だったはずなのに、何かが違う…
…。

彼女はこんな妙な積極性を持つような人なのだろうか。

声が聞こえ辛い距離というわけでもないだろうに…。

胸の鼓動がうるさい。

その喧しいほどの鼓動とともに、どんどん彼女から目が離せなくなっていく。

「そつちが来ないなら、こっちから近付いちゃうから」

「…と、巴……………さん」

巴さんが座る場所をずらし、こちらに近付けた。空けていたスペースが、ぐっと縮まる。

それに伴って、俺の位置から巴さんの顔がはっきり見えるようになった。

俺は、自分でも驚くくらいに狼狽する。

黒子ひとつない白い肌と、ぱっちり開いた二重の瞼。

鼻筋は通っているし、唇は淡いピンクにぷっくりと膨らんでいる。

少しふくよかな体つきは、むしろその魅力を増長させる。

……男として、欲望を感じ得ないほどに、この瞬間の巴さんは扇情的だった。

思わず溢れそうなその欲を、理性を総動員して押さえつける。

「……………どうしたの？ 巴さん、なんて他人行儀じゃイヤよ。いつもみたいに、……………マミって、呼んで？」

今度こそ、俺の頭の中は凍結する。

理性も、そして欲望すらも動きを止めた。

やはり巴は苗字で合っていて、下はマミという名前だったのか。

混乱しきった頭で思い浮かべたのはそんな簡単なことだけだった。

……………少しずつ、氷解し始めた頭で思い返す。

彼女は、巴さんは今なんて言っていた？

「いつもみたいに、マミって呼んで」

おいおい……………おかしいじゃないか。

そんな言葉を使われたら、まるで俺と彼女が恋人同士だって、勘違いしてしまうだろうに……………？

「え……………あ……………」

それを言おうと思っても、小さく声が漏れるだけで、口からは何も

言葉が出てこない。

その間に、彼女は俺との距離を縮めている。

今度は身体ではなく、顔の。

ま、まずい。

俺自身、顔に熱がこもっていくのが分かる。

はやく、やめさせないと、このままじゃ……………！

体は、金縛りにあったように動こうとはしなかった。

「マ、ミ

」

「……………大好きよ」

何も出来ないまま、互いの唇が触れ合った。

柔らかく、しっとりした彼女の唇は、まるで吸い付くように離れない。

俺のかつてにおいても、誰ともキスなんてしたことはなかった。

する必要性なんてないし、生殖行為に行うとしてもその過程は無意味だと思っていた。

その認識を、今この瞬間に、俺は改めてしまう……………。

こんなにも幸せで、こんなにも満たされる行為がこの世に存在するなんて……………！

身体中を駆け巡る甘美なるその感覚に、俺はしばし酔い痴れた…。

「ん……………」

どれだけの間、そうしていただろうか。

時間の感覚すら曖昧になってきた時、不意に彼女の方から離れていった。

頬を染めてこちらを見る彼女は、とても愛おしかった。

度々感じていた彼女への鼓動の正体は、恋だとか、愛だとか…そういった感情だったのだ。

そして、何も知らなかった俺自身に理解させる為に、鼓動という形で俺に伝えてくれていたのだ。

俺自身も、ようやくまともな思考が出来る程度の冷静さを取り戻した。

どうやら、この“俺”と彼女、バマミは恋人同士。

これは間違いないだろう。

問題はそこじゃない。

ここまで来て今更に持った疑問。

キスの際に感じた感覚。

幸福感と、実際に触れているような触感。

ここまでリアルな感覚を、夢で感じることが出来るだろうか。

そもそもこれは、本当に夢なのか？

『胡蝶の夢』というものを聞いたことがあるだろうか。

自分が蝶になった夢を見るが、もしかしたら、今まで自分が人間だった記憶の方が夢なのではないかという話だ。

だいぶ端折ってはいるが、概ね間違っではないだろう。

今の俺はそれに近い体験をしていると言える。

先程は強引に納得していたが、実際ここまで深い思考を巡らせられることが夢として異常なのだから。

しかし、その仮説が正しかったとしても、一つ分からないことがある。

ここを現実とした場合、元の俺は頭が悪かったらしい。

それが、夢（今までの俺）の知識を引き継いでいる。

どちらが現実で、どちらが夢なのか。

はたまた、どちらも現実化も知れないし、最悪、元から“俺”という存在はこの世には存在せず、どちらも夢幻なのかも知れない。答えのないことをいつまで考えてても意味なんてない。

ただ、出来れば。

目の前にいる少女の存在は、夢であつて欲しくない。今はただ、本気でそれを願った。

「……………？　どうかしたの？　やっぱり何か変。授業中に目が覚めてからよ、修司くんがおかしくなったの」

彼女が本当に俺を心配してくれているのが分かる。そして、俺が彼女を本当に好いてしまったことも。

「…なんでもない。ただ、マミがどれだけ大事か、改めて気づいただけだよ。……………惚れ直した、とでも言うのかな」

「えっ……………」

「ありがとう」

「うう……………馬鹿」

顔を赤くして俯くマミ。

その姿は、他の何よりも愛らしかった。

俺はこんな感情を、今まで知らなかった。

そんな感情を教えてくれたマミに、感謝した。

そして、こんな素敵な恋人を持ったこの“俺”に、感謝した。

例え夢かも知れなくても、この体験をさせてくれた世界に感謝した。

「ん…ちよつと用事を思い出しちゃった。ごめんなさい」

ふと、マミは立ち上がり、慌てて屋上から駆け出そうとする。

顔色を察するに、本当に何か用事があるようだ。

そもそも、ここで嘘を吐く理由もないだろうが…。

名残り惜しい気持ちもあるが、ここで長らく彼女を引き止めるのも悪い。

「分かった。また明日、マミ」

せめて最後に、明日また会えるように声を掛けておく。

マミはその言葉に足を止め、こちらに笑顔で振り返った。

「ええ。また明日、修司くん」

それだけ言っただけで今度こそ、マミは駆け出した。

しばらくすると、急いで街道を走っていくマミの姿が屋上からも見えた。

そんな彼女を目に焼き付けようとその背中を眺め
不意に、
記憶がフラッシュバックした。

……………そうだ。

一番最初に見た、あの『夢』。

マミを含めた4人の少女たちが化物と戦うあの夢。

あの崩壊した世界まじの中で。

少女たちも、マミも、化物に（コロ）（コロ）されようとしていた。

嵐の前の静けさ、ということもある…。

考えたくはないが、もしも今日がその日なら。
その日が今日じゃなくても、切欠が今日にあるのなら……！
そこまで考えると、勝手に足は動いていた。

今から追いつくかなんて知らない。

でも、何もせずに後悔するよりは、行動を起こして後悔する方が余程マシだと思った。

例えこれが夢の世界だったとしても、俺が本気で好いた相手をみすみす死なせられるわけがない……！

頭の中で何度もあの光景が蘇る。

これは戒め。

ここで動かなければ、あの結末を迎えてしまうという自分への戒め

……！！

知らない内に下駄箱の場所まで辿り着いていた。

だが、自分のがどれだか俺は知らない。

こんな時、俺だけの記憶しか入っていないことを恨めしく思った。

“俺”の記憶も残っていたなら、ここまで時間をかけることはなかつたらうに。

元々、クラスだけは分かっていたのだから、場所を絞ることだけなら可能だった為、幸いにも3分とかからずに見つけることが出来た。さつきマミは街の方へ向かったはずだ。

元からこの街は結構な大都市のようだが、その中でも一際大きい辺りだった。

唯一の可能性が屋上からの風景というのも頼りないが、何もないよりは十二分に良い。

最も印象深かったのが、CD屋の看板だ。

遠くても分かるほどにハッキリと見えていた。

他にも看板はあったが、日の当たりが悪いのか殆ど見えなかった。

目印にするなら、そこしかない……。

この時、俺は彼女が一体どういう世界に生きているのか、漠然としか知らなかった。

俺がここで追いかけたことで、大きく運命は変わり、俺も戦いの中に吞まれていく。

だが、俺はその選択を後悔することはないだろう。

それが俺の、衛修司のこの世界に降り立った理由に違いないのだから

第二話 「そもそもこれは、本当に夢なのか？」（後書き）

というわけでした。

まさかの最初から修司×マミ！

友達からのつもりがどうしてこうなった。

書いてると勝手にキャラが動く動く。

内容全体的に一話目に比べてクオリティ落ちてるような気がします。
バクマン。の七峰くんパターンか…。

第三話 「間違はなくこいつは、敵だ」(前書き)

ようやく体調もよくなってきたので、再開したいと思います。
取りあえず今回はまどか、さやか、QBとの邂逅。

戦闘シーン難しいです、はい。

第三話 「間違はなくこいつは、敵だ」

足が棒になるくらいに急いで、街道を走り抜け辿り着いた目印のCD屋。

周りを見る限り、客足はかなり多いようで、駐車場には空いたスペースなんてほとんどなかった。

店自体も屋上から見ていたよりもずっと大きい。

ここなら有名どころは勿論、マイナーな物を買って求める客もいるだろう。

これだけの客がいるのも頷けると思った。

……本題はそこじゃない。

ここは、所詮は目印に過ぎないのだから、ここからマミを探しに行動しなくてはならない。

とは言っても、俺はこの“俺”の記憶を共有できていない以上、マミの行きそうな場所なんて知らない。

雰囲気だけで決めるなら、喫茶店くらいか？ という程度の予想しか出来ない。

ざわざわとした一種の虫の知らせを感じながら、心当たりがないことに激しい焦燥感を感じていた。

「……とにかく、適当にでも足を動かすしかないか」

一言呟く。

古来日本には『言霊』ことだまという概念があることから、人の言葉には何か意味と力があると伝えるものが多い。

そういった超常現象オカルト的なものは眉唾ではあるが、今は猫の手も借りたいような気分なのだ。何でも試してみるに限る。

さて、まずはどこから探そうか。
いざ一步を踏み出そうとした瞬間。

『……………助けて』

突然、頭の中に声が響き渡った。

「……………誰、だ」

小さな男の子とも、女の子とも取れるような声だった。
だが、俺は直感で悟る。

……………この声の正体は、きつと人間では、ない。
馬鹿馬鹿しいと笑いながらも、心のどこかでそれは間違いないのだ
と分かっていた。

その感覚は、異質で異様で、何よりも異常だった。

『……………助けて……………』

もう一度、同じ声が頭の中に響く。

今度は誰だ、なんて問わない。

こっちから直接その顔を拝んでやる。

助けて、だと？

ならばその対価に、この先の未来の彼女を、彼女たちを助ける。
そうでなければ、俺はこの声の相手を許しはしない。

ただ、名も知らぬ相手のこの声が俺を救済へ導くならば、その道が
荆棘とげであろうとも、敢えてそれを突き進もう。

抗ってやる、その未来に。

魔法少女に恋焦がれ 第三話「間違いなくこいつは、敵だ」

「関係者以外立ち入り禁止」

大きく書かれた看板の架けられたその扉。
間違いなくここだ…。

あの声の主は、ここにいます。

確信めいた予感が俺にはあった。

同時に、この先に進めば決して戻ることの出来ない道であることも、
理解する。

いや、良い。

とつづくに覚悟は出来る。

別に、なんの力もなくなってもいい。

俺は、彼女の……彼女たちの為の『盾』となると決めたのだから。

近くに落ちていた鉄パイプを拾い、ドアノブを掴む。

そしてその扉をゆつくりと……開ける。

「……………まだ、か」

開けた先は用具庫だった。

暗がりでも鈍く光る用具が怪しげだ。

この場には声の主はいない。

……………もつと、奥だ。

そうして、奥へと歩み出そうとして、

世界が、変わった。

「な……………」

子供のラクガキのような不気味な世界。

小さなキャラクターのような生物がそこらを闊歩している。

辺りを見渡すと、赤、青、緑、黄。

様々な色が入り交じり、その異様さをさらに引き出していた。

《 @ x

! ! ! ! !

それは、合唱。

バケモノたちが声を重ね合い生まれ出る、恐怖を具現した合唱……

!!

ぎよろりと、ヤツラと俺の目が、合う。

爛々と光る瞳には、理性的な色は宿っていなかった。

ああ…間違いない。

ヤツラにとって、俺は餌でしかないのだ…。

「ちいつ……………!!」

今、手元には鉄パイプがある。

あんなバケモノに効くかは知らないが…これも一応武器にはなる。

試さずに済ませるわけにもいかない。

大きく上に上げ、バケモノ目掛けてカ一杯に振る…!

「死ん、でろッ!!」

雑ぐように振った鉄パイプは、バケモノの身体に当たり……そのま

ま通り抜けた。

一瞬で無意味だと判断した俺は、鉄パイプを虚空に放り投げる。遠心力を勢いに変えて、一気に走りだす！

「当たらないとか……嘘だろ……！」

《××

！！》

後ろから、笑うように奇声を上げたバケモノが追って来る。

くそ、思ったよりもヤツラは早い！

ただでさえ足が辛いというのに、これ以上走らせるな……！

そんな俺の願いも虚しく、ヤツラはさらにその速さを上げる。く、そろそろ、限界が……。

「左に避けて」

不意に聞こえたその声に、咄嗟に左に動く。

俺のさつきまでいた軌道を何か小さなモノが走り、バケモノたちを穿っていった。

頭に風穴の空いたバケモノたちは身体を維持出来ずに塵となって消える。

俺はその様子にももくねず、今の声を発した人物に振り向く。

「バミ……」

「危なかったわね」

相手はまさしく俺が探していた相手、バミミだった。

だが、彼女は制服ではなく、舞台女優のような不思議な格好を身に纏っていた。

見間違えようもない。

それは、俺がああ夢の中で見た服と同じだった。

そして、マミの右手には猟銃のようなモノ。

…さっきのはアレで撃つたのだろうか。

「マミ、その服は一体…それに、あいつらは」

「質問はあと。それよりも、他にここに迷い込んだ人がいるわ…助けないと」

一方的に打ち切られ、マミは奥へと進んでいく。

俺も慌ててそれを追いかける。

ふと、後ろを振り向いた。

バケモノはもう全て消え、……………マミが撃つたはずの弾も残っていなかった。

マミの不思議な力……………一体なんなのだろうか。

あの声の正体と出会うことで、この疑問も氷解するのか……………？

「…いた！」

マミの視線の先には、俺達と同じ学校の制服を着た女子が二人。

あれは …… また、夢の。

サーベルを持ち、マミや他の少女たちと戦っていた青髪の少女。

そして、それを離れた所で見えていた桃色の髪の少女。

夢との合致…それは決して偶然ではないことを暗に証明していた。いよいよもつてあの夢が現実味を帯びてくる。

絶望に満ちた世界の中で……………一人、また一人と撃たれていく少女たち。

あそこにいる二人も、マミも、あの世界においてきつと命を失ってしまったのだ。

もしも夢などではなく……枝分かれした世界の一つ、もしくは、この先起こるであろう未来であったとすれば……。

俺は、それを阻止しなくちゃいけない。

あんな結末は認められない。

「私はバマミ。魔法少女よ」

「魔法、少女……」

「そう。そこにいる子……キュウベえとの契約によって、特別な力を持った存在……それが魔法少女」

気づけば、マミと桃色の髪の娘が話をしていた。

……魔法少女、か。

これは俺の願望が産み出した世界なのだろうか？

俺の中の魔法少女に対する熱意と欲望が現実となり、この世界に形として成った……と。

……流石にそれはないだろうが、こうして俺の趣味に合った人物が存在しているのは素直に驚く。

未だに、この世界そのものが俺のしている夢なのではないかという可能性は捨てきれないが……。

「続きは後で。まずはこの『結界』を壊さないと……ねっ!!」

マミがそこまで言い切ったところで、さっきまでと同じ、一つ目のバケモノが多数姿を現した。

マミがスカートを掴み、まるで貴族の少女のようなポーズを取ると、中から銃が出てくる。

…どんな方法なのかは知らないが、おそらくは魔法なのだろう。
こういうのは敢えて突っ込まないのも美德だ。

「はあぁ！」

気合一閃。

と、言うべきなのか微妙なところだが、マミは大きな掛け声と共に銃を乱射する。

バケモノたちは身体中を蜂の巣にされ、その身体を塵に帰した。
奥から少し大きなバケモノが迫ってくる。

それを一瞥し、マミは背後に大量の銃を浮かばせた。

「終わり、よ」

バケモノに向かって、散弾の雨が降り注いだ。

……一溜まりもない。

あれほど何度も撃たれて、無事でいられるはずもなく。

案の定、そこには塵一つ残ってはいなかった。

そして、煙が全て晴れると、周りの景色は不気味な世界ではなく、
倉庫の中に戻った。

これが、さっきマミが言った『結界』が壊れる、ということなのだ
ろうか。

足元に小さな珠が転がった。

…黒い。

何もかもを吸い込んでしまうようなその黒さに、俺は思わず目を逸
らした。

マミがその黒い珠を拾った。

「さあ、その子を」

「は、はい」

桃色の髪の少女はマミに何かを渡した。
先ほど話していた『キユウベえ』というモノだろう。

それがこの世界の魔法少女に対するマスコットの的なものなのだろうか…。

見た目は可愛らしい感じだが…その白い身体には、無数の傷がついていた。

痛々しいが、そこに憐憫の情が浮かばないのは何故だろうか？

それと、この『キユウベえ』もあの夢の中で見た気がする。

……そうだ、確か。

桃色の髪の少女の隣に『キユウベえ』が座り、確か何かを話していたはず。

読唇術など出来ない俺には何を話しているのかは分からなかったが、少女の顔を思い返すに、良い意味に考えることは出来そうにない。

「……これで大丈夫」

どうやら、マミは力を使って『キユウベえ』に治療を施したらしい。
先ほどまで身体中に刻まれていた傷は、綺麗に消え去っていた。
こうして「魔法」を目の前で見ると、凄まじい力だと思った。

破壊も再生も司る万能の力　それを扱う彼女に、憧憬どっけいの念を抱いた。

「…ん」

どうやら、今まで意識を失っていたらしい。

『キユウベえ』は、小さく呻き声を上げる。

閉じていた目が開いて、紅玉のように光る眼が顕あになった。

心臓が、跳ねる。

ときめきとかじゃ断じてない。

これは……警鐘だ。

こいつに心を許してはならない。

こいつの存在だけは、許してはならない。

理性も本能も、全てがこいつに対する嫌悪で一つになった。

それほどまでに、こいつの眼は……何も写してはいなかった。

「ありがとうマミ、助かったよ！」

「お礼はこの二人にいつてちょうだいな」

「君たちもありがとう！」

「う、ううん」

「喋るんだ……」

こいつは……虚無だ。

こいつの在り方も、心も、何もかもが空虚。

こいつは俺たちのことなど、そこらのアリ。

いや……埃程度と同じだと思っている……。

「ところで君たち」

そうして俺は、確信する。

「ボクと契約して、魔法少女になってよ！」

間違いなくこいつは、敵だ。

第三話 「間違いなくこいつは、敵だ」(後書き)

というわけで第三話でした。

アニメの場合は私服の状態が出てきましたが、今回は修司くんを先に助けたので最初から魔法少女状態でまどかたちに会いに行きました。

そして修司くんはQBに対して言葉には言い表せないほどの嫌悪と憎悪を抱きます。

ぶっちゃけ、言葉に言い表せないのは、自分の語彙が少ないからです！
すいません！

あと、修司くんの「盾になる」発言がちよいと伏線になります。回収出来るか分からないではなく必ず回収出来るやつですけどね。せっかく主人公最強タグを付けてるのだから、彼にも戦ってもらわないと。

まあ、何の力もない今は逃げ惑っていたいただきましたがw

以上、ばく庵でした。

第四話 「しかし、不思議な縁というべきか」(前書き)

やべーです。

PCが充電されず、バッテリーも切れてしまったので家での更新が出来なくなっていました。

ということで、公共のPCを使わせてもらってやっています。

2000字目前後からこの状況だったので、そこら辺からやっつけ文になってるかも知れません。

…一応、出来るだけは考えましたけど。

というか、主人公有能にしてるのに作者が無能って大丈夫か…!?

第四話 「しかし、不思議な縁というべきか」

「契、約……？」

少女たちは目を見開いていた。

それは、その言葉の意味を理解出来てないからなのか、理解してその言葉を持ちかけられたことに対する驚きなのかは分からないが……。恐らく、青髪の少女は後者で桃色の髪の少女は前者だろう。

見た目や雰囲気を決めるのは良くないが、何となくそんな気がした。

「それってつまり、あたしたちが巴先輩みたいに変身して戦うってこと？」

「えっ、私たちが!？」

……正解だったらしい。

青髪の少女の質問に、桃色の髪の少女は驚いていた。

どちらにしろ、その契約がどういった内容なのか分からない状態で決めるのは危険だ。

マミは、しっかり理解した上で魔法少女になることを選んだのだろうか。

彼女の真剣な表情からは、何も読み取ることは出来なかった。

「無理に今決める必要はないのよ。詳しいことは後で話すから

」

マミが何かを話そうとしたとき、上から何かが降ってきた。

ガランと大きな音を立てて落ちたそれは、消火器だった。

元々避ける必要もない距離だったが、俺たちの意識をそちらに向け

るのには十分だった。

恐らくその場所から消火器を投げたであろう場所には、黒い髪を靡かせる美少女が立っていた。

……先ほどのキュウベえとは違い、人間らしい眼ではあったが、どこか冷めた表情をしている印象を受けた。

そして何よりも、俺は彼女の姿もあの夢の中で見ていることが重要だった。

他の三人とはそれほど協力的ではなかったが、銃や爆弾を用いた戦いをしていたはずだ。

それと…突然元居た場所と違う場所に一瞬で移動したりもしていた。さらに……今見ている姿でも、夢の中でも付けている左腕の円盤…。

そこから連想できるのは、時空間の制御…という辺りか。少女は親の仇を見るような目つきで見渡す。

それに感化されてか、場は強い緊張感に包まれる。

「……………そいつを渡して頂戴」

美少女の視線の先には、キュウベえ。

彼女の冷たい目の中に、憎悪の色を感じて、先ほどのキュウベえの傷は彼女がつけたものだと思感する。

そしてその憎悪は、決して簡単に拭い去れるようなものではないことも。

「魔女は逃げたわ、仕留めたいならすぐに追いかきなさい。今回はあなたに譲ってあげる」

不意に、ママが強い口調で少女に言う。

まるで、警告でもしているようだ。

しかし少女も簡単には譲ろうとはしない。

「私があるのは」

「呑み込みが悪いのね、見逃してあげるって言ってるの」

今度こそ、ハッキリと警告と取れるようにママは少女の言葉を遮り言った。

他の二人も、まさかママがこんな強く出るとは思ってたのか、だいぶ驚いた様子だった。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

…正直言うと、俺も驚いている。

この短い間に彼女に感じていた印象は、とても温和で朗らか。

そして大したことじゃ動じず怒らないような感じだと思っていた。

それだけに、今まで戦ったようなバケモノでもなく、人間を相手にこういった態度を取るとは思っていなかったのだ。

暫くの間、二人はじつと睨み合っていたが、黒髪の少女はこちらをちらりと見た後に、踵を返してそのまま去っていった……。

その場を支配していた緊張感から解放され、何時の間にか強張っていた身体も弛緩する。

「はあ」

桃色の髪の少女も、緊張の糸が切れたのかその場にへたり込んだ。

……しかし、最後に向けられたあの少女の目。

あの時、困惑の色が濃く出ていた。

まるで、この場にいるはずのない人間を見たかのような。

「取りあえず……家に来る？　そこで詳しく話をしましょう」

俺の思考を遮るようにマミがそう言う。
確かに、いつまでもここに居るのは店側としても迷惑になるだろう。
何より学生がこんなところに集まっているのは怪しい。
しかも男一人に対して女三人ともなれば、俺にどんな疑いがかけられることやら……。
結果として、異論を唱える者は誰もおらず、マミの家まで同行することとなった。

魔法少女に恋焦がれ 第四話「しかし、不思議な縁というべきか」

マミの自宅は、かなりの高層マンションだった。
これほどの場所に住むとなれば、一体俺はバイトを何年続けなければいいのだろうか。

確か、時給が850円だったから……。
いやいや、今考えるのはそれじゃない。

重要なのは、魔法少女について、…キユウベえについて。
そして、先ほどマミの口から出た『魔女』という存在。

普通の魔法少女モノならば、小さな魔法少女よりも圧倒的に強い大魔女がいて、魔法少女の方が、

「わたし、あの人みたいな立派な魔女になります！」
的なことを言うパターンがそれなりに多いが…この場合、『魔女』
の存在は魔法少女と敵対するモノのようだ。

だが、どこかに穴があるような気がしてならない。
……ひとまず魔法少女と魔女の関係性については、マミの話聞いてからにしよう。

俺はいったん考えを止め、個人的興味（マミ宅の観察）に移ること

にした。

エレベーターが止まり、マミの案内の元部屋へ向かう。

「どうぞ」

「おじゃましまーす」

「お、お邪魔します…」

ごくり。

思わず生唾を飲んでしまう。

女子の部屋に入るといふ経験をしたことがない俺には、先ほどの少女との邂逅に勝るとも劣らない緊張感を伴わせた。

変な意味で興奮しないように気をつけなければならぬ。

う、玄関先だけで、すでにラベンダーのようなフレグランスな香りが……。

……静まれ、俺の煩惱よ……!!

「わー、綺麗な部屋ですね」

「ふふ、そんなことないわよ。どちらかと言うと、簡素って言うべきじゃない？」

幾分か冷静に戻ることが出来た。

青髪の子が言った部屋への感想を、俺はそのままに受け取った。

確かに、広々とした部屋の中には家具が置いてあるばかりで、女の子らしくぬいぐるみが置いてあるとか、そういうことはない。

だが、しっかり掃除は行き届いているし、要所には花も飾ってある。十分に、いや、十二分に綺麗な部屋だと言えた。

……マミも謙遜が過ぎる。

教室で見た教科書の『国語?』を鵜呑みにするならば、今の俺たちは中学生ということになるわけだ。高校なら『現文』になるはずだしな。

だが…マミはやけに大人びている。

温和というか、優しい印象を受けるし、“俺”という劣等生の相談にも乗ってくれる。

それと……は、恥ずかしげもなくキスをする、とか。

ああ、でもあのときマミの顔も赤かった。

やはり恥ずかしいのだろうか…。

お、俺は何を考えているんだ…馬鹿か。

「座つて。お茶でも出すわ」

マミがキッチンへ歩いていった。

桃髪の少女は遠慮しているようだったが、青髪の少女が普通に座るのを見て、諦めたように彼女も座り込んだ。

俺も彼女らに倣い、敷いてあるクッションの上に座った。

ふかふかして柔らかかった。

「改めて自己紹介しましょうか。私はバマミ、さっきも言ったとおり、魔法少女よ。別に先輩とか、無理につけなくてもいいわ」

「か、鹿目まどか…です」

「美樹さやかです、よろしくお願ひしますね。マミさん」

「ええ、よろしくね。鹿目さん、美樹さん」

桃髪の少女がまどか。青髪の少女がさやか、か。

取りあえず、ずけずけと名前で呼ぶのも失礼かも知れん。

俺もマミと同じように苗字に「さん」付けで呼ぶようにしよう。

しかし、不思議な縁というべきか。

今ここにいる4人全員、苗字を名前として使っても何の違和感のないのである。

まもるともえ
かなめ
護、巴、鹿目、美樹。

まあ、だからなんだと言われればそれまでだが…。

ただの偶然と考えても、同じような仲間が出来た気分でなんとなく嬉しかった。

おっと、俺も自己紹介しておかないと。

「俺は護修司だ。マミと同じクラスメートで……ん、えーと……」

「恋人よ」

「ぶっ」

ま、マミのやつ、俺が正直に言っているものか迷ったことを堂々と言い放つただと……！

俺の苦悩はいつたいなんだっただ…。

「えー！ お、お二人って恋人さんだったんですかっ！？」

「ヒューヒュー！ おアツいねー！」

く、鹿目さんの反応はまだしも、美樹さんのそれはなんだ…完全に野次じゃないか。

いや…普通に「恋人さん」なんて言い方は今時しないだろ…。

って、そうじゃなくて！ …か、顔が熱い……！！

そしてマミ、その勝ち誇った顔はなんなんだあ…！

「あー、もう。今はそういう話を聞きにきたんじゃないだろう。魔法少女についてじゃないのか？ 本題は」

「そ、そうね」

すっかり忘れてたな、マミよ…。
さらに正面に座る後輩二人からも追撃。

「えー、もっと聞きたいですよー」

「わ、私も、興味あるかな…」

なんだなんだ。俺に味方はいないのか？

しかし、女の子って基本的にこういう話が好きという傾向にある気がする。

男もそういう話をしないわけじゃないが、女の子の場合は余計に顕著なイメージだ。

実際、彼女らは結託して俺に話を聞きたがってるわけで…。

しかしだ、もし話すにしたって、俺は“俺”の記憶を持っていない。今日の授業の途中で目が覚める前、ここで俺がどんな生活をしていたか、何も詳しい情報を知らないのである。

よって、俺から何か色恋トークをすることは不可能なのだ！

残念だったな、美樹嬢よ。ここは諦めてもらおうか…。

「美樹さん。修司くんの言うとおり、私たちの本題は別。しっかり聞いてちょうだいね」

「う。…は、はい」

マミの後押しもあり、二人はようやく折れた。
ふう、もし俺一人だったらずっと迫られただろうな…。
マミが良識のある女性でよかった。本当に。いやマジで。

「コホン。……………まず、魔法少女とは何か、についてね」

軽い咳払いの後に、マミはゆっくりと話し始めた。
キュウベえとの契約によって魔法少女の力を得る。
契約の際、どんな願いでも一つだけ叶えてくれる。
その代償として、契約してからは、死ぬまで魔女と戦い続けなければならぬ…。
そして、マミが魔法少女になった切っ掛けと、その願い。

「私を知ってるのはこれくらい。あとは…まあ、命の危険があるってことくらいかな」

「ま、マミさんは…怖いって思わないんですか？」

「もちろん、怖いわよ。せつかくあの時助かったのに、こんな形で結局死ぬのは嫌だなんて…でもね、私、本当はあの時に死んでるはずだったのよ？ だったらこの命は…せめて誰かの為になって、誰かの為に…立派に死にたい」

「っ……………」

それは、マミの覚悟だった。

誰にも相談できず、たった一人で戦っていた少女の、覚悟であり

独白。

鹿目さんも、美樹さんも、その思いに息を呑むことしか出来なかつ

た。

部屋には、長い静寂が訪れた

。

第四話 「しかし、不思議な縁というべきか」(後書き)

ということでした。

後半のママさんによる詳しいお話を大分割愛しましたが、特に意味はないです。

べべ、別に、この辺のセリフ忘れたなーとか、見直して確認するの
だるっ…とか思っていないですよ!? ほ、ホントですよ!?

今回の話は今までののに比べても出来が悪い気がします。

次の話のときには改善させたい…。

あと、この話は独自解釈が含まれます。

結界内の使い魔相手に鉄パイプが効かなかったように、です。

あー、主人公最強のタグ少し修正した方がいいかもですね。
ぶっちゃけ、脳内の修司くんは攻撃はイマイチなんです。

以上、ばく庵でした。

第五話 「お前らみたいな、悪魔とは違うッ！……！」（前書き）

第五話です。

今作オリジナル（？）シーンです。

いつもより字数が多いです。

頭が爆発しそうです。

なんだかグダグダな感じになった気がします。

あと、さっそくQBの正体とか諸々のネタバレありますので、**注意**です！

第五話 「お前らみたいなの、悪魔とは違っツ!!!」

あれ以上、マミについて詳しい話をするのではなく……あの後は俺を含め、鹿目さん、美樹さんとマミの魔女退治に暫く付き合うこととなり、その場は解散となった。

別れ際のマミの少し寂しげな顔が印象的だった。

今は当てもなく適当に街を彷徨っている。

……二人。鹿目さんと美樹さんにとって、どんな願いでも叶えられるというのは魅力的だが、それでも命の危険は付き纏う。

その為にマミが取った処置がそれ、魔女退治に付き合うというものだ。

実際の魔女退治というものを目で見て、肌で感じて最終的な決断を下す。

俺としても……、キュウベえ。アレの胡散臭さには疑問視している。マミはアレを親しげな友人のように接していたが、俺はどうにも敵だと感じてならない。

願いを叶えて、その代償として魔女と死ぬまで戦い続ける。それに嘘偽りはないだろう。そ

だが、そこにまだ何かが、ある。

魔法少女になるなんてファンタジーなものでなくとも、世の中には“契約”なんてものは有り触れている。

その中で良く聞く「しっかりと契約書を読んでいれば」云々というアレだ。

契約をして貰いたい側は、得てして相手側に契約によるデメリットを認知してもらいたくないものだ。

だから、会って話す内容はメリットしかないし、デメリットは契約書の分かりにくいページだったり、もしくは肉眼で見れない程度に小さいものだったり。

極端に言えば、契約書を確認する時間を与えないまま、サインさせ

ようとしたり。

つまり、キュウベえにはまだ俺たちに隠している『デメリット』があるんじゃないのか。

「ここに本人がいれば、問い詰めることも出来るんだが」

「呼んだかい？」

「ぶっ」

ちよつとした独り言のはずが、突然背後から聞こえた対応の声に吹き出してしまう。

振り向くと案の定、そこには件の生物ナマモノ キュウベえがいた。

どうしてここに、という疑問も出てくるが……丁度いい。考えていたことをこいつにぶつけるチャンスでもある。

渡りに船とはまさにこのことだ。

しかし、こいつが俺の後ろにいた目的が分からない以上、慎重にならざるを得ない。

まずはこいつの出方から探った方がいい……。

「……何の用だ？ お前がお望みの少女二人はここにはいないぞ」

「ふう、人間の常套句だね。そうやって自分とは関係ない者を引き合いに出すことで、相手の目的や動向を探ろうとする。そんなことをしたって意味もないのにね」

……見透かされている、か。

こいつ、やはり信用ならない。

だが、今の発言は他の者が関わらない話をしようとしている、とも取れる。

つまり、今のこいつの目的は……俺。
何の意味もない、ということはない。
十分な収穫と言えた。

だが、まだこちらの疑問をぶつけるのには早い……。
こいつの用件を聞いてから、だ。

「なら、変に取り繕うのは止めよう。単刀直入に聞く
俺に何
の用だ？」

だが……一体なんだ。

この、ざわざわとした感覚。
触れてはいけないモノに触れたような……。

「うん、こつちも単刀直入に言わせてもらおうよ」

次のヤツの言葉を聞いて、その感覚は一層強まった。
何故なら、触れたような、ではなく……触れてしまったのだから。

「僕と契約して、魔法少年になってよ」

魔法少女に恋焦がれ 第5話「お前らみたいな、悪魔とは違うツ！

！！」

キユウベえの用件。

それは、俺が魔法少女ではなく、魔法少年として戦うというものだ
った。

どう考えてもおかしい。

まず先の話进行返すに…、こいつとの契約を行うに当たったの大前提として、第二次成長期の“女性”であることが必要だったはずだ。

だというのに、こいつは俺に契約を持ちかけている。

それはこの大前提を覆し、ママやそれ以前から生まれてきた魔法少女たちの常識を崩すことになる行為だ。

俺には、こいつの真意が見えない…。

こいつった不可解な発言をすることで、俺の混乱を誘っているのだろうか…？

「…どういう意味だ？」

「はあ、キミの要望通り単刀直入に言ったのに、結局その概要を聞きたがる。まったく、わけがわからないよ」

「……いいから答えろ！」

煙に巻くような言い方をするキュウベえに、思わず頭に血が昇ってしまう。

その結果、強い語調になってしまった。

まずい……冷静になれ。

怒りは判断を鈍らせる。

こいつが何を考え、俺にその話を持ちかけたのか。

それが見えない以上、怒りに身を任せるわけにはいかない。

もし混乱を誘おうとしているのなら…良かったな、その作戦は成功だよ。コノヤロウ。

「…分かったよ。君はね、とても奇異な存在なんだ。生物学上、男性には決して存在しえない膨大な魔力を内包し　　尚且つ、

僕”が見えているなんて。

今までに前例がない以上、君は非常に貴重なはずの存在なんだ。衛修司」

魔力　　。

それはママの説明のときにも聞いたものだ。

魔法少女は全員、魔力を有しており、戦うための力の源だと。

「確かに、人間は誰しも魔力は持っているよ。けど、大多数はほんの僅かな魔力しか持っていない。ごく一部が、ママや鹿目まどかたちのように魔法少女になるだけの力を　　才能を持つてる。いけば僕はアンテナのようなものさ、大きな魔力を持つ少女を探し出す」

「そうして、探し出した相手に契約を持ちかけるわけか」

「そうだよ。ただ、この星に僕“たち”が訪れてからの数千…数万。統計上、魔法少女になり得るだけの魔力を持った存在は第二次成長期の少女以外存在しなかった。これは事実だ…けどね、前例がないからと言って、未来永劫その可能性が断たれているわけじゃないかった」

つまり、俺という存在は人間の誕生と同じだと言いたいのだ、こいつは。

過去の地球において、全ての生命は海から産まれた、とされる記述は少ない。

常に海で活動していたはずの生き物は、突然、陸での活動を可能とし、やがて様々な動物へと変化していき、最終的には俺たち、人間という存在へと繋がる。

そういう記述は確かに少ないが…なぜ、どうして海の生命は陸

で活動するに至ったのか。

それについて詳しく書かれているものは殆どないと言ってもいい。つまりは、突然変異の存在、ということだ。

俺も同じく、本来の人間としての環わから外れた、特殊な存在だと言いたいのだ…。

「随分と大仰な話になってきたな…」

「何も大げさなんかじゃないさ。何度も言うように、これは前例のなかったことだ。君は、世界でただ一人、男性でありながら魔法を扱う権利を得たんだ」

「……………」

俺が言いたかったのは、確かに俺が唯一の存在であることもそうだが、それ以上のものが一つある。

今さっきのこいつの発言……「この星に僕たちが訪れてから数千…数万年」。

その言葉が真実であるならば、俺たちが生まれる前よりもずっと昔から…こいつは、いや、こいつらは地球に居座っていたことになる。そして恐らく、こいつには凄まじい数の仲間がいる。

…

…

もしくは…考えたくはないが、こいつは単一の個体ではなく、全く同じ個体が複数いる可能性。

そこまで思考して、ようやく今まで抱いていた疑問。そして今回の対話で沸いた新たな疑問を全てぶつける時だと判断した。

この先話を聞く機会があっても…その時にはもう、全てが遅い気がしてならなかった。

だからこそ、今、この瞬間に、こいつから全て聞き出す。

「聞きたいことがある」

「なんでも聞いていいよ。君には魔法少年になって欲しいのだけど、強制は出来ないからね。聞きたいことは全部聞いて、しっかり考えて」

「お前は、誰だ？」

最後まで言い切らせず、途中から遮るようにその言葉を叩き付ける。キユウベえは目を細め、俺の目を真正面から見据えた。

「……………質問の意図が読めないね。もっと端的に済ませてほしいな」

「十二分に端的だ。意図は自分で考えろ」

「…意地悪だね、君は。いいよ、答えるよ。」

僕は、いや……………僕たち複数個体はキユウベえと名乗っているけれど、正式名称は違うんだ。

正確にはインキュベーター（Incubator）。意味は、君ほどに聡明なら分かるだろう？」

インキュベーター……………つまり、孵卵器。

その名の意味するところは…何かの卵を、こいつが正しい環境の元に孵化させる、ということだ。

だが、こいつの場合、鶏の卵だとか魚卵だとか、そういうった優しい物じゃあないだろうな……………。

「……………お前が孵化させるのは、何の卵だ」

「魔女だよ。魔女の卵」

「魔女の、卵……………」

それは、こいつが魔女の卵を孵化させ、魔女を誕生させるといふことなのか。

だとすれば、こいつの行動は矛盾を起こす。

魔女を生むと同時に、魔法少女を契約によって生み出す。

当然、魔法少女とは魔女と戦うものだ。

戦いあうもの同士を生み出すことに、何の意味がある…………。

「魔女の卵が出てくる条件は二つあるんだ。一つは、使い魔ではなく魔女そのものを魔法少女によって打倒されたとき。必ずというわけではないけど、倒された魔女はほぼ卵を生み出すと言っていい」

「…もう一つの条件の前に聞いておこう。その卵が生み出されることで、魔法少女に利点はあるのか？」

「魔女の卵は、グリーンフィードと呼ばれている。ここでは略称としてGSと言わせてもらうね。それと、マミが見せてくれた宝石、覚えてるだろう？」

「ソウルジェム、か」

「そう。今回はGSと同じように、ソウルジェムもSGと略させてもらうけど、ややこしいとは思わないでね。SGに籠められた魔力は、使えば使うほど当然消費されていく。同時に、SGには魔女を討つことで足りない魔力の代わりに負の感情を押し込められる」

負の感情？

魔女が倒されるとき、その恨み辛みを最期に残していく…置き土産
ということだろうか。

「GSは、SGに溜まった負の感情　穢れを吸い取り、再び十
全な魔力を取り戻させることが出来るんだ。穢れを魔力に変換して
戦うことも出来るけど…ね」

最後の言葉を聞いたとき、頭の中に一つの可能性が浮かんだ。
それは、余りにも……今まで戦ってきた魔法少女を蔑ろにしている
としか思えないものだった。

「まさか……その穢れを変換し続けた末路が、もう一つの条件なの
か…！」

「ご名答。やっぱり君は聡明だ、とても話しやすい」

そして、その予想は当たってしまった。

SGに溜まり続けた穢れはやがて破裂し……魂は穢れによって塗り
替えられる

「もう一つの条件、それは魔法少女が戦い続けた果てに待っている、
魔女化という運命だよ。」

この国では成長途中の女性のことを少女って呼ぶんだろ？
だったら、やがて魔女になる彼女達のごとは　魔法少女と呼
ぶべきだよな」

そこまで言い切ったヤツの顔は、いつもと変わらない無表情。
だが、その奥に見えた。

下卑たように笑う悪魔の姿を……！！

「お、前……ッ！！ 騙っていたのか！ 今まで魔法少女になってきた人たちも！ 鹿目さんも、美樹さんも！！ …………… マミのこともッ！！！」

「騙していた、なんて随分と酷い言い方だね。僕はこのことを君が聞いてきたから、しっかりと質問に答えただけだよ。でも彼女たちはどうだい？ 何も聞かなかっただろう。つまりはそういうことさ」

何てこともないようにヤツは言い放った。

やはり俺の悪寒も、嫌悪も、憎悪も！ 何も間違っちゃいなかった……！！

こいつは悪魔だ……例えどんな理由があるにしろ、俺たち人間にとつては、悪魔以外の何者でも、ないッ……！！

「別に良いじゃないか。どうせ魔女化する身体は、本来の肉体じゃないのだし」

……今、なんて言った？

本来の肉体じゃ、ない……。

「本来の肉体じゃないってのは……どういう意味だよ……！」

「言葉通りだよ。君も薄々気付いていたんじゃないかな？ SGの意味を。ソウルジェム、魂の宝石 契約した魔法少女の魂はSGに封印され、代わりに、強い衝撃に耐えれて回復力も高い仮初の肉体を用意する。すごいだろう？ 魔女化しない限り、SGさえあれば身体がどんなに傷付いても死ぬことはないんだから」

仮初の肉体、だと……。

「マミのあの身体は、偽物だというのか…？
確かに人の身体だった、柔らかさもあつた、温もりもあつた……！
それも全て、偽りだつていうのか……！？」

「唯一の弱点としては、SGと肉体が離れすぎると肉体の活動が停止することかな。まあ、肌身離さず持つていればそういうことはないだろうから、大丈夫だよ」

「……………」

「なんだい？　ここでだんまりを決め込まれても困るな。まさか、非人道的だとも言いたいのかな？　勘弁して欲しいよ」

「……………」

「せっかくだから全部話しておいた方がいいかな。僕たちインキューベーターはね、孵卵器であると同時にこの星を、いや、この宇宙を守っているんだよ。」

「エントロピーを知っているかい？　…愚問だったね。君ほどの頭脳ならその程度の知識は持っているって当然か。」

「星と同じように、宇宙にも寿命はある。エントロピーの増大に伴いその寿命が訪れたとき、その宇宙の星々に住む生命は当然滅ぶしかないよね。だからこそ、それを少しでも先延ばしにするためにこの魔法少女機関を作り出したんだ。」

「君たちが思っている以上に、人間が持つ感情というものは強いエネルギーを有しているね。その中でも特に妬み、憎しみといった負の感情が強い。」

「そこで、魔法少女の魔女化だ。魔女化するにおいて、魔女の討伐によって引き継がれる分もそうだけど、本人がどんどん悪い方向に思考を向かせるだけでも多大な負の感情が期待できるんだ。」

そうして魔女化したとき、その本人が抱き続けていた感情エネルギーは宇宙の寿命を延ばす為の力として蓄えられる。

それはつまり、この星を、この宇宙を守ることに繋がるんだ。分かってもらえたかな？

感情を持つ君たち人間にこんなことを言っても無駄かも知れないけど、数人の人間と宇宙と、どっちを守るべきか………当然、分かるよね？」

「……………魔法少女ってのは、生贄同然だったことなのか……」

「ようやく返事をしてくれたね。いくら感情を欠いた僕でも、意思の疎通くらいは行いたいからね。もう黙っちゃ嫌だよ？」

まあ、君の質問は概ね当たっているよ。最終的に殺されるか、魔女になるかのどちらかなんだから。でも永久機関が止まるのは困るし、感情エネルギーもまだまだ集めなくちゃならない。だから新しい魔法少女を探し出して、契約してもら

最後まで言わせる前に、俺はヤツの首を思いつきり掴みあげた。

どうせ複数個体だったのは分かっているんだ。

このまま、絞め殺してやる……！

「…暴力的だね…！ 君ほどの頭脳を持っていても、人間である以上感情には逆らえない、ということなのかな…？」

「黙れ！ お前らにとっては宇宙は大事だろうよ…。確かに、俺たちだって宇宙がなければ、星がなければ生きられない！ でもな、俺たち人間は、誰かが傍にいなきゃ生きられないんだよッ！！ お前らとは違うんだよ……お前らみたいな、悪魔とは違うッ！！！」

「悪魔とは、酷い言い草だね…。どちらにしても、魔法少女たちの

運命は変わらない」

カクンと、ヤツの首が垂れ下がる。それから、何も言葉を発しない。その瞳にはもはや光は灯っていなかった……。

「し、死んだ、か………?」

「うん、死んだよ。その“僕”はね」

「……!!」

いつから居たのか。

俺の背後には、既に『新しい』キュウベえが居た。

「正直言つと、処理が面倒だからあまり死体は増やしてほしくないんだけどね。ああ、もう手は放していいよ」

……言われるまでもない。

こんなモノをいつまでも触れていたくない。投げつけるように手を放す。

「乱暴だなあ。まあ、どちらにせよ死んでるから構わないんだけどね。……モグモグ」

「……う、」

思わず吐きそうになり、その場に蹲ってしまふ。

ヤツの言う『処理』とは、己の死体を自分自身で食すことだった…。
見ていて気持ちのいいものではない……。

「きゅっぷい。さて、僕からの用件は全て伝えだし、君の質問にも
答えた。返事は今すぐには言わないけど、なるべく早めに決めて
ほしいな。君は、魔法少年になるのかどうか」

冗談じゃない。

そう言い返したかったが、それを言えるほどの気力もなく…。

ヤツがそのまま夜の街に消えていくのを、黙って見送るしかなかった……。

第五話 「お前らみたいな、悪魔とは違うッ！……！」（後書き）

修司くんは頭はいい設定ですが、熱くなりすぎると何も考えずに行動してしまうときがあるようです。

作者がキャラを把握しきれてない……！！

だって、勝手に動くんだもん……！！

きゅっぷいきゅっぷい。

第六話 「…乗りかかった船だ。やってやるよ」(前書き)

だいぶ遅れました、はい。

活動報告にも書いたんですけど、なかなか時間が取れなくてですね。取りあえず、2〜3時間出来たこの暇な時間を続き書くのに注ぎ込みました。

とは言っても、結構慌ててやったんでアラが目立つと思います。そこら辺、どうかご容赦ください。

ということ、第六話でござりんす。

第六話 「…乗りかかった船だ。やってやるよ」

俺が“俺”になって、二日目の朝を迎えた。

あのヤツとの話の後、冷静に思い返してみると、相当俺らしからぬ行動だったと思う…。

いくらヤツに対する怒りに溢れ、ヤツ自身が自分の命を軽く見ていたとは言え、殺す、とは……………。

それと共に、余談ではあるが、大事なことに気付いた。

この“俺”の自宅がどこなのか知らないことである。

…この件については、学生証に当然の如く住所が書かれていたため、紆余曲折あったものの家に辿り着くことが出来たのだが。

自宅は、ママとは違い、服の散らばったアパートの一人部屋だった。どうやら、“俺”は一人暮らしであり、しかも生活はずさんだったらしい。

俺も、家族と共に過ごす利便性と大切さを感じていた反面、一人暮らしに憧れる身であったため、この状況は願ってもないことだった。いずれ、寂しさなどの感情は生まれるだろうが、元々掃除などの雑用は苦手じゃない。

今は未知の経験を学んでいこうと素直に思えた。

改めて、昨夜の話を読み返す。

魔法少年、か…。

ヤツの話の内容は余りにも残酷で、もしも今まで魔法少女になってきた娘たちがそれを知っていたならば、契約なんてしなかったろう…。

魔法少女になって魔女から人々を救う、と言えば聞こえは良いが、宇宙を救うために生贄になってくれ、と言われていたのと同じなのだ。

俺がかつて見てきた魔法少女アニメのような、優しい物語なんかではなかった。

ヤツは自分たちには人間の感情は理解できないと言った。ならば、その感情の有無による認識の違いが生まれるのは当然だ。しかし、ヤツらはそれを無視して自分たちの都合を押し付け、人間たちに…いや、魔法少女たちに生贄の役目を強いる…。

それは、とても罪深いことだ。

人は人であるが故、誰かを傷つけることもあれど、誰かを守ろうともする。

だからこそ、あらゆる感情が欠如し、命を何とも思わないヤツらの思想は、決して理解出来るものではなかった。

こうして思案している内に、昨夜にヤツを絞め殺したことに對する罪悪感も薄れてきた。

そして、俺は覚悟を決める。

彼女たちには知られないように、人知れずヤツらを始末し続ける…。

それが彼女たちの救いになると信じて。

時計を見ると、短い針が8時を指そうところだった。

さすがに時間がない。

肩に鞆を掛け、扉を開く。

「いつてきます」

誰もいない空間に向かって一言。

言い慣れた挨拶を済ませて、玄関から外に出た。

空は、腹ただしいくらいに美しい青色だった。

魔法少女に恋焦がれ 第六話「…乗りかかった船だ。やってやるよ」

少し急ぎ気味に教室に駆け込む。

すでに席についていたママが、笑顔で俺に手を振っていた。

笑顔を作る余裕もなかったため、軽くひらひらと手を振ることで返す。

しかし、昨日からも感じていたが、この全面ガラス張りの教室はどうにかならないだろうか？

なんだか非常に落ち着かない。

大抵の教室は窓は付いているものだが、ここまで極端に見られるような作りになっているのは見たことがなかった。

その落ち着かなさで生徒たちに監視されているような錯覚を持たせ……なんて考えもあるのかも知れない。

考えすぎかも知れないが。

だが、そんな中でも授業中に寝ていた“俺”は相当図太い神経の持ち主だったらしい。

俺自身、品行方正であるとは思わないが、少なくとも一般常識くらいは備わっているつもりだ。

正直、“俺”の生活は褒められるような物じゃなかったことは容易に想像できた。

……部屋も汚かったし。

そんな“俺”と一緒にいて、それも恋人という関係であるママは…何というか、優しいというか、包容力があるというか。

まあとにかく、俺には勿体無いくらいの相手であることには間違いない。

授業中、教師は俺が珍しくちゃんと起きているからという理由で問題を俺に当てた。

……そんなにも寝ていたのか、“俺”は。
“俺”には申し訳ないが、今の中身は俺だ。
このくらいの問題ならば、普通に解ける。

黒板……というには高性能過ぎる映像ボードの前に立ち、長い数式を書き込む。

後ろから「おお」という驚きの声が聞こえる。

薄々分かつてはいたが、やはり“俺”の頭の悪さは周知の事実だったらしい……。

確かに、昨日まで毎時寝ていたやつが急にスラスラ問題を解けば違和感を感じるだろうな……。

まあ、今更“俺”の真似をするなんて出来ないし、そもそも俺は俺のやり方しか出来ない。

クラスメイトや教師には、時間の経過で慣れてもらうしかない。

「出来ました」

「え、ええ……正解よ」

教師から正解を告げられ、そのままペンを置き席に戻る。

高レベルな問題ではあったのだが、中学生で解ける、というレベルな以上、ミスをしない自信がある。

高校問題になり、それも3年の後半でやるような問題になってくると少し分からない箇所も出てくるが、少なくとも赤点を取るようなものでもない。

慢心でもしない限り、失敗することはないだろう。

授業も終わり、休み時間になる。

すると、マミではなく少し離れた席に座っていた男子生徒が近づい

「いや、冗談だから」

「なにい!?!」

何となく、“俺”の記憶を持っていなくても、こいつとはバカやっていた関係なんだろうな、と察した。

うん、特に理由はないが……強いて言えば、身体が覚えてるってやつか。

それでも、相手の名前を知らないままというのは、凄くもどかしいと感じた。

「ちくしょう騙された……! 陰謀だ! 策略だ! 裏切りだー!」

「めんどくさいヤツだな」

そうして、名も知らぬ友人との会話を楽しみ、休み時間は過ぎていった。

昼休み。

昨日のようにマミと屋上に向かおうと思ったが、何やら急いだ様子でどこかへ走って行ってしまった。

基本的に真面目なマミが廊下を走るといふ行為を行ったことに驚いているのか、周りのクラスメイトたちも口々に何かを言い合っている。

それでも、その内容が「何か忘れ物でもしたのか」とか「体調でも悪いのではないか」とか、マミを悪く言うようなものでないことは嬉しく感じた。

マミは、あまり周りと接することはなかったようだが、少なくとも

悪い印象は与えてないらしい。

しかし、一体なぜあんなに急いでいたのだろうか？

また何か魔女の気配でもあったというなら、事情を知った俺に何か一言はあってもおかしくはない。

何も言わなかったということは、本当にマミ自身の私情なのだろう。断定するのは良くないが、私情だったとしてそこに首を挟むのも悪い。

俺は一人、先に屋上に向かうことにした。

屋上への階段を昇る途中で、何か声が聞こえた。

この声は……美樹さんか？

どこか怒気と怯えを孕んだような声だった。

だが周りは魔女の結界に閉じ込められた様子じゃあない。

美樹さんが鹿目さんに対してあんな言い方をするとお思えない。

であれば、昨日のあのもう一人の魔法少女……。

考えられる可能性は、それしかない。

多少急ぎめに階段を駆け昇るが、もう美樹さんの声は聞こえない。

すでに話は終わってしまったらしい。

屋上に続く扉を見上げられる場所まで来たとき、すでにあの少女がこちらへ向かっているところだった。

俺の真正面まで来たところで、少女は立ち止まる。

その目は、何かを伝えたがっているようにも感じる。

なんだ……何を言いたい……？

「あなたは……」

少女は口を開いた。

何を聞かれても良いように、身構えておく。

「あなたは……、何者？」

「……………なに？」

それは、昨日俺がヤツ
インキュベーターに問うたことと同じだった。

一体、何者なのか。

ヤツはその質問に、自分の正体と何を目的にしているのかを答えた。ならば俺も同じように、自分の正体を言わなければならないのだが……………正体も何も無い。

今、ここに居る俺。それこそ俺の正体に他ならないのだ。

それとも、“俺”が俺として生きているという今の状況をこの少女は分かっているのか？

現時点では、少女の質問の真意は見えない……………。

そこでふと、昨夜の、初めての邂逅の記憶がよぎった。

少女が俺たちを見回して去るとき……………こちらを一度注視して、去って行ったんじゃないか？

その時の少女の目に写っていたのは、困惑の色。

……………

まるで、その場にいるはずのない人間を見たかのような。

そして、先ほどの問い。

そこから導き出される答えは

「俺は……………本来ここに居るべき人間じゃ、ない……………？」

辿り着いたその解答に、俺は思わず頭を抱える。

そんな俺を見て、少女は一言。

「…混乱させてしまったようね、ごめんなさい。明日の放課後、屋上に来てくれる？　そこで詳しい話をしましょう」

一日分の、冷静になれる猶予を与えてくれたのだろうか。もしもそうなら、今の俺にはとても有難かった。事実、とてもじゃないが…今は冷静だとは言えなかった。

「私は暁美ほむら。あなたの名前も教えて」

「……………修司。衛修司だ……………」

混乱し切った頭の中で、何とかそれだけ返す。

少女　ほむらは「そう」とだけ答えると、階段の下に消えていった。

誰もいない階段の踊り場で、ゆっくりと壁にもたれかかる。

はぁ、と溜め息を一つ吐いた。

もしも、俺の考えた答えが正しいなら…今の俺こそ、他の何よりも偽られた存在だ。

本来は“俺”であったとかでもなく、俺も“俺”すらも、衛修司が存在しない世界…………それが世界が本来あるべき姿。

「……………わけ、分かんね。なんで俺なんだよ……………ちくしょう」

普段の口調も崩れ、吐き捨てるように言う。

どうして、『ここ』にいるのが俺なんだ。

他の誰でも良かったじゃないかよ……………。

……………。

「……………ああっ！ クソツタレがアアッ！！」

咆哮。

そして、右手で思い切り顔を殴りつけた。

思った以上に力が入ったらしく、口の中に鉄の味が広がった。

それと共に、頭がハッキリとしていく。

「何を弱音吐いてんだよ、俺…！ 決めただろ、あの夢みたいにならないようにするってよお！」

そう、俺は決めたはずだ。

昨日、俺がこの世界に訪れたときに見た夢
マミ、鹿目さん、
美樹さん、ほむら。

そして、今は出会ったこともないもう一人の、赤髪の魔法少女。
彼女たちを守るための盾になると、決めたはずだ。

こんなところで、腐ってる場合じゃない…！

もう一度、頬を殴る。

口の端から血が流れていく。

これは、戒めだ。

もう二度と弱音を吐かないという、強い強い戒めの襖。

「…乗りかかった船だ。やってやるよ」

言葉に出して、決意と誓いを顕す。

そして、俺は光の射す屋上へ上がっていく。

屋上で、顔の傷で慌てる鹿目さんと美樹さんを見て、俺は決意を更

に強めるのだった。

第六話 「…乗りかかった船だ。やってやるよ」(後書き)

ということでした。

修司くんの恋愛要素『ではない』心の葛藤、的なテーマ…のつもりだったんですけどお……なんか、微妙？ な感じが、します。

頭の中で「こうしよう」と考えても、文に書き起こそうとすると、何やら考えていたものとは違う方向にホイホイ進んじやうんですよ。ああ、怖い怖い。

あと、全然見てなかったアクセス解析を開くとPVが16,625
アクセス、ユニークも3,152人とかかなりの数が！

稚拙な文とは思いますが、こんな話をこれだけの人が見てくださっているというのは嬉しいですね。励みになります！

これからも拙作を見ていただけると嬉しいです。

よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4000t/>

魔法少女に恋焦がれ

2011年6月29日17時31分発行